慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ラバヌス・マウルスのこと(〔羅〕Rabanus Maurus780?-856)
Sub Title	Rabanus Maurus (780?-856)
Author	田中, 克佳(Tanaka, Katsuyoshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1996
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.43 (1996.) ,p.31- 43
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000043-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ラバヌス・マウルスのこと（[羅] Rabanus Maurus 〈780?–856〉）

田　中　克　佳*

Katsuyoshi Tanaka

Previously I tried to introduce Alcuin (735?–804) through translating *ALCUIN AND THE RISE OF THE CHRISTIAN SCHOOLS* (by West, Andrew Fleming, 1893, London) into Japanese (See No. 36 of this bulletin).

This is a similar work to introduce Rabanus Maurus (780?–856) who is predicated as "the greatest and almost the latest of his [Alcuin's] disciples, ..., the *Primus præceptor Germaniæ*" (p. 125).

はじめに

先に筆者は，所謂ヨーロッパの起源を画するカール大帝（Kaal I der Grosse, 742–814: 西ローマ皇帝，フランク王。下記著者の表記では，チャールズ大帝）の事業に力を貸して古代学芸や教育の復興に尽力した，アングロサクソン人のアルクイン (735?–804) について，名著の誉れ高い West, Andrew Fleming (1853–1943. American Educator) の "ALCUIN AND THE RISE OF THE CHRISTIAN SCHOOLS", 1893, London によって，その活動の翻訳・紹介を試みた[1]。

本稿は，この「アルクインの弟子の中で最も偉大で，ほぼ最後の弟子であったゲルマニア第一の教師 the *primus præceptor Germaniæ*」とされるラバヌス・マウルスについて同様の紹介を試みるものである。(以下，章立て・章名は筆者の構成による。また，叙述の必要上筆者が書き加えた部分は［　］で示し，訳出部分の上記原著ページを (p. x–) で示した。また本稿中の［ランダム］は『小学館ランダムハウス英和大辞典』，［岩］は『岩波西洋人名辞典—増補版』，［キ人］は『キリスト教人名辞典』(1986, 日本基督教団出版局)，[DCB] は『A DICTIONARY OF CHRISTIAN BIOGRAPHY』[SMITH, W. ed., 1974, N. Y.] の略記である。)

* 慶應義塾大学文学部教授（教育学・教育史）

第1章　ラバヌス・マウルスの生い立ちと人となり

ラバヌスは，776年にマインツに生まれた。まだ子どもの頃，教育を受けるためにフルダの大修道院学校に送られ，ただちに修道生活に入った。この学校は，すでに多大の名声を博していた。その基礎は，「ドイツの使徒」と称されるボニファチウスによって据えられていた。シュトルム Sturm が最初の大修道院長であるが，彼は，747年に自らの大修道院の手本を求めてイタリアのいくつかの大修道院を訪づれ，帰国して，ベネディクト修道会系の中でも最も重要な位置を占めたモンテ・カシノに倣ってその大修道院と付属学校を作った。二番目の大修道院長は，780年から802年まで支配したボーガルフ Baugulf である。この期間は，宮廷学校ならびにトゥールにおけるアルクインの活動のほぼ全時期と一致する。この修道院は，当時の主要な大修道院の一つであったが，アルクインの指導の下にチャールズによって始められた教育復興の直接的影響を受けた。787年のあの偉大な法令＝ボーガルフ宛の写しは，当代まで保存されてきた唯一のものである［前稿 p. 117 参照[1]］。ラバヌスは，ボーガルフとその後継者のラトガー Ratgar の下で若い時期の勉強に従事したが，このずばぬけた才能をもった生徒に対してラトガーは，不断の深い関心を寄せたのだった (p. 126)。

ラトガーは，間もなくアルクインの名声に引かれた。

フルダの古い手記の記録する事実によれば，彼は，802年に「自由学芸の勉強のために，トゥールのアルビヌス先生［訳註・アルクインのこと］の下に，ハットーHatto と一緒にラバヌス」を送った。ラバヌスは，この親切を忘れなかった。彼は，ラトガー宛のいくつかの詩の中に感謝の念を記録している。また自らの記憶力のなさを嘆きながら，それでも先生に教えていただいたことはすべて忠実に書き留めたことをラトガーに請け合っている。すなわち彼は，「私が書物を学ぶことが出来るようになったのは，あなたのご親切のお蔭ですが，私自身の頭の悪さが私の息を詰まらせます。そういうわけで私は，先生が私に口ずから教えて下さったことは何でも，私の漫然とした知力が取り落とさない限りすべて，数葉の書冊に書き留めました[2]」といっている。トゥールでのラバヌスの勉強仲間に，フルダの大修道院長としてラバヌスを継いだ，先に触れたハットーと，ハルベルシュタットの後の大司教のハイモ Haymo，ならびにロルシュの大修道院長となったサミュエル Samuel がいた。ラバヌスは，アルクインの下で過ごした学生時代を決して忘れなかった。彼の百科事典『宇宙論 *On the Universe*』の序文の中でラバヌスは，「学問を学び，聖典についての思索を凝らし，聖典と聖父たちの聖典解説のみならず，聖父たちの自由学芸についての説明とその他の研究に記録された『地上の分別ある人』によってなされたあの事物の本質についての鋭い探究を，共に読んで[3]」過ごしたトゥール時代をハイモに想い起こさせている。ラバヌスをひじょうに高くかったアルクインは，彼の習慣に従って，聖ベネディクトのお気に入りの生徒であった聖マウル St. Maur をまねて，この生徒にマウルス Maurus という特別のあだ名を授けたのであった。トゥールに一年以上滞在した後ラバヌスはフルダに戻り，ラトガーからただちに大修道院付属学校を預けられた。アルクインがこのことに大賛成であったことは，彼が803年にラバヌスに宛てた，自分と自分の生徒たちへの祝福を切に求める短い書簡[4]から推測される。しかしアルクインのこの生徒に対する関心は，これでおしまいにはならなかった。その後の一通の書簡は，さらに彼とラバヌスが親密な文通を続けたことを示している[5]。

この書簡の中でアルクインは，ラバヌスに，彼が「聖なる知恵」に傾倒するようになったこと，ならびに彼の「学問愛好」について祝福を述べている。以前から，お手本にするためにアルクイン自身の行いと習慣を語るものを書いていただきたいと求められていたことに対する返事には，ラバヌスにそういうものが必要だとは，といった驚きを表明している。すなわち彼は，「昼も夜も一緒に過ごし，またあなたに隠し立てなど一度もしたこともなかったのですから，あなたが私に，私の行いを記述するよう求めるというのは驚きです。」と書いている。ついで彼は，その生涯が聖書に記録されている聖人たちのお手本に倣う方がずっとよいということを想起させ，また何よりも「予言者たちが予言し，福音書が述べているキリストを求めること」を熱心に勧めている。語を継いで彼は，「そしてあなたが彼を見付けたら，通り過ぎるままにしておかないで，あなたの心の家に案内し，あなたの生活の師として滞在させなさい」と述べている。また彼は，自らの内部の知力が増すように，また教師としての自らの職務に配慮するようにラバヌスに教えている。「というのは『持つ者には与えられるであろう』，つまり教える意欲を持つ者には知力の明敏さが与えられるであろうからである。」彼の生徒たちは，「歳をとった時に教えることが出来るように，若いうちに学ぶ」よう熱心に勧められている (pp. 126–9)。

ラバヌスの学校の仕事を手伝ったのはサミュエル Samuel であるが，その他にも助力者はいた。この大修道院の蔵書は，おそらくトゥールから蔵書の一部を手に入れて，大いに豊かなものになっていた[6]。奇をてらって「clavipotens frater」つまり「鍵を支配する兄弟」と呼ばれた図書係りのガーホッチ Gerhoch に宛てた詩の中で，ラバヌスは，その蔵書の広大さについて，「親愛なる兄弟よ，私は，あなたがあなたの鍵で保管している書籍を何といって賞讃したらいいだろうか。そこには世界中の賢者が幾歳月もかけて出版してきたすべてのものがある」と絶讃している。詩的誇張があるからといって，私たちは，その蔵書が豊富で，当時最も完備したものの一つであったことを疑問視する必要はない。その大部分は，ラバヌスが自著に引用している著作家リストから得られる書名によって，おそらく再構成することが出来るであろう。彼がその蔵書を大切にしたことは，トゥールでアルクインが，学校を助けるのに無くてはならないものとして蔵書を利用することで示したお手本に，熱心に倣おうとしたことを示すもう一つの証拠でもある。彼の生徒の数は多く，中には有名になった者もいる。例えば，ヴァラフリードス・ストラーボ［後出］，セルヴァトゥス・ルプス Servatus Lupus，ラバヌスの伝記作家のルドルフ Rudolph，ならびにワイセンブルクのオトフリッド Otfried がそうである。おそらく彼の生徒の総数は，アルクインのそれをはるかに上回っていたであろう。というのは次代の教育上の著名な人びとのうち，フ

ルダもしくはそれより小さい22の支部学校にさかのぼれない人名は，きわめて少数だからである。一方，四番目の大修道院長のエイジル Eigil がみまかって，822年にラバヌスはその後を継いだ。そこで彼は，自由学芸（リベラル・アーツ）を教える任務を他の人たちに託し，聖書の解釈を自分の任務として保持したのであった。大修道院長としての彼の成功は有名である。彼の支配の下でフルダの修道院は，急速にその基本財産と生徒数，ならびに支部学校数を増大した。フルダの修道院の学問と高潔さとに対する名声は，ドイツに限らずフランク全土に広がり，イタリアにまで拡大した。ラバヌスは，諸王や諸候の顧問となり，法王の顧問にさえなり，アレクインの衣鉢を継いだ人物として，特別の尊敬をもって仰ぎ見られるようになった (pp. 129–31)。

20年にわたる大修道院支配の後，彼は，842年に引退した。信者仲間は，しきりに彼を呼び戻そうとしたが，彼の拒絶によって，代わりにハットーを選任した。そこでラバヌスは，近くのペテルスベルクに隠居し，瞑想と著作に専念した。847年にマインツの大司教に任命され，856年にライン河の川岸にある隣りの村で死去した。遺体は，埋葬のためにマインツに連れ戻された (p. 131)。

ラバヌスは，アルクインの最も偉大な生徒であったが，師よりはずっと大きな人物であった。彼は，師よりも大きな鋳型で作られていた。彼は教会の保守的な息子ではあったが，教会の教育上の伝統を幽閉するよりはむしろ発展させようとして努力し，アルクインに見られた伝統の制限の外にあるあらゆる事柄からのあの臆病な尻ごみ――これが，アルクインの知的活動を非常に拘束したものである――が，彼には全く見られない。危険な両刃の剣と見られた弁証法という異教の武器を，彼は，真理のために躊躇なく摑み取り，文法を語と文字と綴りの不毛な研究から呼び戻して，再び文学の研究と結び付け，天文学を，たんに教会暦を計算するための計算早見器とする代わりに，高尚な知的訓練としてこれを勉強することを勧めたのであった。その他の学問についても同様である。当時広く行き渡っていた誤りの多くから解放されえなかったとはいえ，アルクインの自由学芸の扱いに著しく多くの改良を加えた面目は，彼に帰せられなければならない。世俗的学問の全体が，彼の教えを受けて，しかも偏見無しに，聖書の研究にまで広がっていった。彼はまた，スコラ哲学生起の原因ともなった思想の一般的前進にも貢献したことは，明らかである。大胆にも彼は，宗教上の事実の体系化に理性の手順を適用することを主張した。そしてこの点で彼は，伝統の無批判な粗雑さとエリウゲナ[7] Erigena の無責任な思弁的精神との中間の位置を占めている (pp. 131–2)。

彼の精神的気質は，全体的に，アルクインのそれ以上にあけっぴろげで，勇敢であった。自然の出来事を論じることになった時，彼は，神秘的な原因のせいにするような子どもじみたやり方は取らないで，造物主の定めた自然の秩序と結び付けて論じたのであった。また当時迷信深い群衆が，「だんだん欠けていく月を救おうとして」太鼓を打ち，角笛を吹き鳴らし，泣き声をあげた時，彼は，彼らを叱りつけ，天空の規則正しい変化や不吉な前兆さえもが，すべて，自ら創造した世界を繰作する力を備えた賢明な造物主のなせる業であることを想い起こすよう命じたのであった。また彼には，当然予想されることであるが，顕著な心やさしさと同情心があった。彼は，貧者に対して気前がよすぎるといって一再ならず叱られたことがあったし，飢饉の時には，苦しみを軽減するために骨身惜しまず努力したのであった。彼の名前に付いてまわる，他人に対する不当な厳しさの唯一の例は，予定説についての異教的教えのために彼の命令で行われた僧ゴッテスチョーク Gotteschalk に対するムチ打ちである。しかしこれを別にすれば，ラバヌスは，厳格な訓練主義者ではあったが，その全生涯を通じていつも変わらない人間的な人であった。また彼は思慮深い人でもあった。というのは，チャールズ大帝の後継者たちを取り巻くドロドロした血生ま臭い衝突や陰謀や，彼が院長になる以前から彼の修道院を引き裂いていた激しい内部抗争の只中にあって，彼の身の処し方は，どの党派からも尊敬を受け続けたからである。概していえば，ラバヌスの人柄は，自立性と精力に満ちたものであった点で私たちを魅了するが，それらは，人間的で良識に富んでおり，自らの仕えた教会への誠実な尊敬によって，実際上中庸を得たものであった (pp. 132–3)。

第2章　ラバヌスの教育上の著作と活動

しかし主に教育の面で，彼の教師ならびに著作家としての活動は注目に価する。そのどちらの活動も，彼の重要な教育上の著作によって知られることは，大へん好都合である。これらの著作は，個別に，また若干詳細に吟味される価値がある。

彼の著作は，基本的にはすべて私たちに伝わっているが，それらは確かに大部であり，全体としては師匠のアルクインのそれの，少なくとも三倍の大きさがあり，やがて現れるスコラ哲学の著作物の途方もない大きさの前

触れを思わせるものである (p. 133)。

［神学上の著作］

彼の著作の大半――おそらく全体の八分の七――は，神学上の著作であり，主として新訳ならびに旧訳聖書の三十三書についての，一連の入念な，注釈と解説と「叙法 narrations」にさかれている。それは，箴言，エレミヤ書，エゼキエル書〔訳註・いずれも旧訳聖書中の一書〕とともに，旧訳聖書のモーゼ五書〔訳註・旧訳聖書の最初の五書〕とほとんどすべての歴史物語についての，さらにマタイ伝ならびにパウロ書簡〔訳註・新訳聖書中の14編〕のすべてについての，字義的・寓意的・神秘的な完全な説明を含んでいる。以上の仕事の全体を通じて，彼は，ただ，彼に先だってつねに存在していた，自分と他人を完全に聖書に精通させることという理想を追求したに過ぎなかったのである。というのは，彼の著書『聖職者の教育について *On the Instruction of the Clergy*』の中に「知恵の基礎と確立と完成は，聖書の知識の中にある[8]」と書いてあるからである。聖書にある知識には，永遠不変の賢者から流れ出る知恵――至高者ご自身の口から流れ出る知恵さえも――が含まれている。それは「他の一切の生き方の誕生に先立って，最初に生れ出たもの」である。聖書の中にある尽きることのない光は，「まるでカンテラから漏れ出る光のように全世界に流れ出るのである」。彼は，この光によって勉強し，屈することなく全霊をあげて，至高の卓越者について語るために自らの長い人生を捧げたのであった。(pp. 133-4)

［教育関連の著作］

ところでラバヌスは，彼の神学上の著作に加えて，その全体もしくは一部が教育にかかわってくるいくつかの論文を書いた。『聖職者の教育について』，『計算について』，『プリスキアヌス文法学抄録』，『宇宙論（おそらく『万物について』と同義のタイトル）』，簡約『ラテン-チュートン語語彙辞典』，小冊子『言語の起源について』といった著作が，そうである。以上の著作に，おそらくアルクインの「霊魂論」と同様のアウグスティヌスに基礎をおいた簡潔な「霊魂論」が，付け加えられるべきであろう。

『聖職者の教育について』[9] は，聖職者の最も知る必要のある事柄についてぜひ概説を作って欲しいというフルダの修道僧やその他の人びとの要望に応えて，819年に書かれた。それは，三巻に分かれている。第1巻は，教会の組織，教会の聖職位，教会の法衣と聖礼典〔訳註・洗礼，聖餐，など〕を論じている。第2巻は，教会の聖務の範囲，年間の祝日・斎日，教会勤行の諸役割を記し，聖書と正統教義ならびに敵対するさまざまの異端についての若干の注記も含んでいる。第3巻は，ラバヌス自身が述べているように，「聖書に書かれている一切の事柄，ならびに異教徒の学芸・研究に含まれるもので，聖職者に有益な事柄の調査と研究法を教えている[10]」(pp. 134-5)。

教育上の関心を引くのは，この第3巻である。というのは，それは，もともと聖職者教育用のマニュアルを意図して書かれたものであるが，世俗的学問に関する多くのことを含んでいるからである。この巻は，聖職者としての神聖な職務を遂行しようとする人は誰でも，「十分に知識のある，廉潔な生を送る，そして完全な学識を持った」人であるべきであるという提案から始まっている。続けてラバヌスは，これをさらに十分に明確化して，次のように述べている。すなわち「このような人は，自分と自分に従う人びとに教授する義務のあることについては何であれ，すなわち聖書について，明白な歴史上の真理について，修飾句の多い言い回しについて，神秘的事柄の意味について，あらゆる学問の効用について，正直な生き方と清廉な道徳について，教義を説く際の知恵について，さらに様々の精神的病いにふさわしい種々の治療法について，無知であることを許されるべきではない[11]」と。それゆえ彼のいう教育ある人は，聖書・歴史・修辞的表現法の理解・様々の自由学芸のもつ有益な知識の一切に精通しているべきなのである。「これらのことを知らない人は，他の人びとに役立たないばかりか，自分自身にも役立たない。それゆえ人びとの未来の統治者は，それによって勇敢に敵を打ち破り，自分に託された会衆を保護する武器を，前もって暇な時に準備しておく必要がある。なぜなら魂の師牧に任じられた人が，すでに教える準備ができていなければならない時になってはじめて学習意欲を示すということは，下劣なことであり，統治者が自らの知恵の力で自らの重荷を十分に支えられず，誰か他人に持ち上げてもらうということは，危険なことだからである。」次いであの，最盛期のラバヌスの言葉を聞くことになる素晴らしい文章が現れる。すなわち「長期にわたる勉強によって事前に学習している者でなければ，何人も，何らかの学芸をずうずうしくも教えることは許されない。[12]」という……。命令的口調が必要だったのである。というのは彼は，無知な聖職者の名誉ある地位への昇進に対して呵責ない戦いを展開していたからである。彼のいうところでは，「ただ野心だけで教会内部での昇進を求める者がいる。聖書が証言する通り，市場での最初の挨拶や祭日での主要な場所や

会堂での主要な座席をむやみにほしがるのは，このような人たちである。……彼らは，予言者イザヤに『これらは，自ら述べていることの理解できない牧師たちである』と非難される無知な牧師たちである。彼らの無知のために，彼らに従う人びとがつまづくのである。また福音書の中で真理であるキリストが，『もしめしいがめしいを導けば，両者とも溝に落ちるであろう』と語られるのは，このような理由からである。」このような聖書の訓戒と実例によってラバヌスは，第3巻の開巻の章を展開し，聖職者を高めるのに必要な教育を述べるための道を準備する (pp. 135-7)。

次いで第2章で彼は，聖書は永遠の知恵である神ご自身の至高の言葉であるから，聖書の知識は，知恵の始まりであると同時に完成でもあることを説明する。どこかにあるかもしれないこれとは別の真理は，それが教会の内にある場合でも教会の外にある場合でも，聖書が由来するのと同じ永遠の知恵に，その源泉を持っていることは確実である。しかし聖書は神聖な知恵の卓絶した至高の言葉なのだから，聖書は，教会の内部もしくは外部世界に見い出される知恵にまさっている。しかも一切の真理の源泉は一つであるから，「どこかにあるかもしれないどんな真理も，真理テストで真理として知られるはずであり，どこかにあるどんな善も，善の基準によって善であると知られるはずである。『地上の分別ある人』の書物に見い出される真理にしてかつ知恵ある事柄で，真理そのものや知恵そのもの以外の源泉に帰すことの出来るものはない。なぜならそれらの真理は，もともと，それらの真理がその著書に発見される人びとによって構成されたものではなく，永遠の昔から存在してきた真理だったのであり，彼らはただその発見者にすぎないからである。というのは真理と知恵こそが，万人の教師にして啓蒙者であり，彼らに真理を探し出す力を授けた当のものだからである。それゆえ異教徒の書物にある有益な知識の一切が，さらに聖書の有益な真理も，一つの意図のために使われるべきであり，一つの目的に帰せられるべきである。すなわち真理についての完全な知識と最高に卓越した知恵の追求という意図・目的のために。」と彼は語を継いでいる。これは，ラバヌスの声で語られる，最も寛容な気分にとらわれた時のアウグスティヌスの復活である。アルクインの精神の狭量さや尻ごみは，もうここには存在しない。そして以上のような一節においてラバヌスは，アルクインに比べて巨人に見えるのである。次いでこの巻は，アウグスティヌスの『キリスト教教義について[13]』という論文をぴったり後追いしながら，聖書研究の精神と方法を説明している (pp. 137-8)。

第16章以下の11の章は，世俗的学問に捧げられており，自由七科の各々に個別の章が当てられている。まずラバヌスは，古代の世俗的学問の，基本的に事実に合致した事柄と，それに付加された誤った作り事を区別する。作り事というのは，一切の魔術，偶像崇拝，縁起かつぎ，占星術の予測，ならびにその他様々の「有害な迷信」のことである。一方，現世で私たちが生活するのにきわめて必要な人間的学問の集成は，キリスト教徒の決して卑しむべきものではない。いやそれどころか，それは，「学ばれ，心にしっかりと受け入れられる」べきものであり，このことを行う者は誰でも，学べは学ぶほど，一なるものと理解された真理の全体が「一なる神への敬意と愛[14]」に帰することを理解するようになるだろう，と彼は主張する。これに続く自由学芸についての説明は，どれも，たいへん興味をそそるものである。文法を彼は，「詩人と歴史家を理解する科学であり，正しい書き方と話し方の技術である。それは，自由学芸の基礎を成すものである。」と規定している。アルクインは，文法を，正しい書き方・話し方の説明に限定していた。ラバヌスは，この狭い形式的側面に，ローマの文法家たちのもっと広い定義に含まれていた文学的側面を付け加え，そうすることで文法を，アルクインの限定のために陥入っていた不毛の状態から救い出している。しかし一方で彼は，古典詩人たちとの比較の上でキリスト教徒を褒め讃え，「著名な書物の作家」としてユウェンクス Juvencus〔訳註・Gaius Vetius Aquilinus, 330頃活躍。スペインの司祭。最初の重要なキリスト教ラテン叙事詩人。[キ人]〕，セドゥリウス Sedulius〔訳註・5世紀のキリスト教的ラテン詩人 [岩]〕，アラトール Arator〔訳註・500以前-550頃。キリスト教ラテン詩人。聖書叙事詩「使徒の行動について」《De actibus apostolorum》[2巻，544年] は，中世を通じて広く愛読された。[キ人]〕，アルキムス Alcimus〔訳註・Edicius Avitus, 5世紀中頃-523。[DCB]〕，クレーメンス1世 Clement〔訳註・30頃-101頃。ローマのクレメンス。1世末のキリスト教会の状況を伝える第一級の歴史資料「クレーメンスの第1の手紙」「使徒教父文書の一」を書いたクレメンス1世，のこと。[キ人]〕，パウリヌス Paulinus〔訳註・M. P., 353?-431 ローマの詩人，キリスト教宣教者，聖人 [岩]〕およびフォルトゥナートゥス Fortunatus〔訳註・Venantius, 530頃-610頃。キリスト教ラテン詩人。『トゥールの聖マルタン伝』など11巻の著作がある。[キ人]〕[15] の名をあげている。彼は，古典詩人を読む

ことを認めてはいるが，それは主として彼らの咲かせている「雄弁の華」のためという限定付きである。彼は一般的結論として次のように書いている。すなわち，「それゆえ異教の詩人を読む時，また世俗的知恵を含んだ書物を入手した時には，それらの詩人や書物に見い出される有益な事柄は何であれ，私たち自身の教訓に変えてしまうことにしよう。しかしもし世俗的事柄を偶像視したり愛求したり好んだりすることになるような何か不適切なことがあれば」そのような一節はすべて，無視するか削除するかすべきである，と (pp. 139–40)。

修辞学に関する章は，とくに注記するほどのことは含まないが，次の弁証法に関する章は重要である。彼の定義によれば「弁証法は，定義と説明にかかわる，また真偽を分かつ能力さえもった理性的な学問である。」このような見解は，アルクインとは著しく対照的である。アルクインは，正誤を見分ける手段としての弁証法の能力についての主張をこれほど大胆かつ徹底的に奨励したことなど一度もなかったのだから。しかもラバヌスは，次第にきわめて大胆となり，さらにまた次のように主張する。「したがってこれは，学問の中の学問である。それは，私たちに教え方・学び方を教える。弁証法において理性が姿を現わし，理性が何であるか，理性が意味するもの・感知するものが何であるかをはっきりと示してくれる。この学問だけが，知り方を知っており，進んで他人を知るようにさせ，かつそれが出来るのである。というのは，私たちが弁証法を用いて推論する時，私たちは，私たちが何であり，私たちの存在の原因が何であるかを学ぶのである。私たちは，善い行為者と善い行為のちがいや造物主と被造物のちがいを理解する。私たちは真理を探究する。私たちは誤りを捕える。弁証法によって私たちは，次に生起することと生起しないこと，完全な誤謬だけでなく，矛盾すること，真なること，概然的なことを推論し，識別するのである。」(pp. 140–1)。

ラバヌスは，ボエティウスを大きく前進させた人物であり，中世初期の弁証法による論証活動を意識的に始めた人物であると考える人もいるが，そのように考えることは出来ない。しかしそれでも彼が熱狂的に弁証法を推奨したことは，確かに，後の論理学の君臨に途を拓く上で有力であった[16]。いうまでもなくラバヌスが弁証法を武器として規定したような武器は，教会にとってすぐれた価値を持つものでなければならない。「したがって聖職者は，異教徒のずる賢さを鋭どく見破り，三段論法の魔術的結論によって彼らの見解を論破できるように，この最も高貴な術を知るべきであり，熟考するさいにたえずその規則を先行させるべきである」と彼はいう。彼の思弁的な同時代人のスコトゥス＝エリウゲナでさえ，これ以上のことは要求しえなかったであろう。それでもなおラバヌスは，真理と彼のいわゆる詭弁を区別することによって身を守っている。すなわち彼は，「真なる見解だけにではなく誤った見解にさえ，関連づけの真の方式というものがある。今やこれらの関連づけの真の方式は，教会の外の学校で学ぶことが出来る。しかし見解の正しさは，教会の神聖な書物の中で学ばれるべきである」といっている。論理の諸形成は，教会の外でも学ぶことが出来るが，健全な結論に到達するのに必要な真理の内容は，教会の聖典の中でしか学ぶことは出来ないのである。そしてここにこそ，結局，弁証法を利用する彼の利用法とエリウゲナの利用法との違いがあった。ラバヌスは，エリウゲナとはちがって，聖書と同等の価値をもつ教義内容としてプラトンやマルティアヌス＝カペラを利用することを，決して是認しようとはしなかったのである。また彼は，終始一貫していた。というのはひとたび，聖書こそが最高の真理であり，他の真理はそれら聖書の光りに照らして理解されるべきであると主張した後は，彼の論証する主題は終始変わることなく限定され，論証に先立って評価を与えられたからである (pp. 141–2)。

文法・修辞学・弁証法をこのように論じた後，筆を進めて彼は，残りの四科――一般的習慣にならって彼は，これを数学（マセマティックス）という一般的名称に含めている――の叙述を行っている。四科の第 1 番目は，算術，つまり純粋で単純な「数量の勉強」である。彼の説明に従えば，それは，その知識なしには音楽も幾何学も天文学も追求することの出来ない，基本的な「数理の学」である。キリスト教徒は，この世俗的勉強を卑しむべきではない。というのはアブラハム Abraham〔訳註・Noah の大洪水後の最初の族長［ランダム］〕が算術と天文術の両方をエジプト人に教えた最初の人物であった様子を，かの最も博識のユダヤ人のヨセフス Josephus〔訳註・Flavius 37?–100 頃 ユダヤの歴史家・将軍［ランダム］〕が語っているからである。師父が信徒の間に蒔いたこの知識の種子を，信徒たちが育て，またそれから他の諸学を発生させたのである。次いで教父たちもまた，算術の勉強は抽象的瞑想に導くことで現世的欲求から心を転じてくれるという理由で，算術の勉強を強く勧めており，聖書もまた算術の勉強を多くの箇所で勧めている。神ご自身が，私たちが知恵の書 the Book of Wisdom に読むように，「寸法と目方と数によって」世界を創造されたのである。いやそれ以上に，福音書がはっきりと言明しているよう

に「私たちのまさしく頭髪が数えられているのである」。それから，数的調和と比率にしたがって世界を創造される造物主を描く聖書ほどではないにしても，「大きな権威を持つ」プラトンの諸著がある。その他聖書で言及されている特定の数の神秘的意味にも，考慮すべき事柄が見い出されるべきである。「例えば6という数は完全な数である。というのは，神は世界を6日で創られたのだから。」とラバヌスはいう。さらに大胆にも彼は，次のように述べる。「私たちは，神が6日で創造の仕事を成し遂げられたから6という数は完全なのだというべきではない。6という数が完全な数であるからこそ，神は創造の仕事を6日で成し遂げられたのだというべきなのである。いや，たとえ神の仕事が6日で終わらなかったとしても，それでも，おそらくその数は完全な数なのである。」今や，聖書が多くの人びとに全く内容不可解の書である理由は，算術を知らないからなのである。「したがって，もし誰かが聖書の知識に達しようと思うならば，算術を学べばそれだけ容易に聖書の神秘的な数を理解できるようになるから，熱心に算術の勉強をする必要がある」と彼は書いている。アルクインだったら，一般的には，算術についてのこの説明を心から称賛したことであろう。しかしそれは，以下の二つの点でアルクインの意に反している。すなわち，若干の限定付きながらプラトンを「大きな権威を持つ」として引用している点と，神ご自身の活動を規制するものとして「完全な数」が述べられている点で。このように，弁証法においてだけでなく算術という精神的不毛の地に，すでに思索の若芽が生じ始めていたのである (pp. 142–4)。

幾何学についての説明は，ラバヌスが，エリウゲナのお気に入りの書物の一つであったプラトンの『ティマイオス *Timoeus*』のカリキディウス Chalcidius〔訳注・4世紀後半–5世紀後半。哲学者。左記のラテン語訳と注解[未完]は，5世紀初頭の執筆と推定されている。中世における数少ないプラトン文献として広く読まれた。[キ人]〕によるラテン語訳を読んでいたことを示している。「哲学者たちは，ジュピターが幾何学的方法で事を処理していることを彼らの著作の中で立証している」と彼はいっている。「もしこの言い方が賢明にも全能の造物主である神に適用されるならば，おそらくそれは真理と一致するであろう。というのは，もし私たちにこのような言い方が許されるならば，幾何学は，創造にさいして多様な幾何学的形状や型を課し，また今日まで存続しているという理由で独自の神聖な尊厳を持っているからである」と彼は，思慮深い論評を述べている。星の運行と「一定の線で表わされる」(*statutis lineis*) 物体の性質が，幾何学の神的聖遺物 (*sancta divinitas*) の実例として引かれている。一つの技術としての幾何学の起源はエジプト人に帰されており，また幾何学が測量と共に始まったことを証明するために「ラテン人の中で最大の博学者」バロ Varro〔訳注・M. T. 116頃–27? ローマの学者，著述家[ランダム]〕が引用されている。幾何学をキリスト教徒に受容可能なものにするために考慮されるべきことは，幕屋（まくや）〔訳註・エジプト脱出後ユダヤ人が荒野をさまよったときの移動式聖所で，ソロモンがエルサレムに神殿を建立するまでのもの[ランダム]〕や神殿を建てる際に，幾何学が使用されたということである。それらの建造のさいには，「直線，円，球面，半球の測定ならびに四角形の測定も」明らかに必要であった。結局のところ，「全ての幾何学図形に通じていることは，霊的識別力を得るのに役立つのである。」(pp. 144–5)。

音楽は，「音楽に関連する数，すなわち音に現れる数を取り扱う学科」と定義されている。例えば「ある音は，他の音の2倍，3倍，あるいは4倍である。」音楽はひじょうに有益なものであり，歌唱のさいの楽しい転調だけでなく，音読のさいの正しい発音も音楽的技能を必要とするから，それが無ければ教会の勤行が十分には遂行されえないほどである。それはまた有益であるばかりではなく，高貴でさえある。というのは，「天地と天地にある一切のものが調和（ハーモニー）に支配されており，ピタゴラスは，世界は音楽の和音（調和のとれた音）に従って創造され，和音によって統治されていると証言している」からである。しかしピタゴラスが唯一の根拠というわけではない。音楽の技術はキリスト教徒の宗教と溶け合っており，音楽を知らないことは信仰への障害となる。ミューズの女神たちをジュピターの娘たちとする異教の迷信など何ら気にすべきではない。自身は異教徒であった博学のバロは，ジュピターがミューズの女神たちの父親でないことを示して，この考えを論破したことがある。しかしバロの見解が真であろうとなかろうと，さしたる違いは生じない。「というのは聖書を理解するのに有益な助けをそこから引き出すことが出来る限り，それが異教徒的迷信だからという理由で，ミューズの女神たちの司る学芸である音楽を避けるべきではないからである。」そのような振る舞いは，異教徒がマーキュリーは文学の神だといったから文学を学ぶことを拒否し，あるいは異教徒が正義と美徳に神殿を献納したから正義と美徳を行うことを拒絶するというにも等しい大愚行である。「逆に一切の真理は，何処で発見しようとも主に属するもので

あることを，善良な真のキリスト教徒の誰もが知るようにせよ」とラバヌスは，アウグスティヌスの見解をそのまま繰り返しながらいっている (pp. 145-6)。

次にくる天文学の説明は，弁証法の説明のさいに現れるのとほぼ同様の大きな熱狂によって照明されている。彼が冒頭に述べていることは印象的である。「もし私が，洗練された，穏健な精神をもってこの研究に従事するならば，それは，古代の人びとがいうように，敬意にあふれた深い愛で私たちの思想を満たしてくれるであろう。精神において神々に近づくこと——合理的探求によって神々の天上のメカニズム（機構）の一切を探求し，そして気高い，知的洞察によって，何処かで，また至る所で，秘密のベールで覆われた神々の途方もない偉大さを認めること——は，何と偉大なことであろう!」このような洞察力に照らして見る時，天文学を教会の祭日計算のための厄介な器械とみるアルクインの，天文学に関する長ったらしい書簡の，何と弱々しく，貧弱なものであることだろう！ ラバヌスが，教会暦の決定が天文学の一つの仕事であることを拒否しているということではない。それどころか彼は，明確に，その仕事を天文学に含めている。しかし彼にとって天文学は，はるかにそれ以上のものなのである。それは，「造物主が命じられた通りにしか動き方，止まり方を知らない星々の法則」の研究なのである (p. 146)。

七つの学芸が，今や再検討に移される。「ここに，哲学者たちの七つの自由学芸がある」と彼は述べる。「七つの自由学芸 seven liberal arts!」それは，明らかに，この用語の用語史上，最初の使用例である。キリスト教は，幾世紀もかかってついに，古代人の自由学芸 *artes liberales* から自由七科 *septem artes liberales* への転換を成し遂げたのである。自由学芸に対する敵対感情から寛容精神へ，ついで友好的尊重へという感情の変化は，西欧キリスト教世界においてアウグスティヌスとカッシオドルスの時代以降，ゆっくりと完成して，自由学芸の採用と，同時にそれら学芸を接頭辞としてキリスト教名を付けることで終了する。ラバヌスは，説明を結ぶにあたって，「すべてのキリスト教徒に有益」なものとしてそれら学芸を一般的に推薦し，さらに付言して，「哲学者たち，とくにプラトン学派の哲学者たち（彼はいつでも，全く喜んでプラトンを口にするというわけではないけれども）が書いたものの中で真実で信仰にかなったものなら何であれ，恐怖心をもって見るべきではなく，私たち自身の利用に供するために採用すべきである」といっている。この主張をいっそう強化するために，彼は，かつてアウグスティヌスが述べたエジプト人の金・銀を手に入れることと彼らの迷信と偶像崇拝を避けることについての話を，繰り返している。最後の，そして最上の警告として，彼は，一層高等の研究に近づくために自由学芸の教授を受けてきた人びとに対して「*Scientia inflat, charitas oedificat*」(「知識は膨らむが，愛は高まる」) という使徒の標語をつねに想起させる聖書について想い起こすようにといっている (pp. 146-7)。

この作品の以後の部分は，とくに説教にかかわる，賢明で雄弁な話し方に関連した種々雑多な教示に捧げられている。民衆に語りかける時，容易に理解される言葉を用いる必要に関する第 13 章の彼の言葉は，「彼自身の時代から今日まで，すべての説教壇に金文字で彫り込まれて然るべきであった。[17]」同様にその言葉は，当然，あらゆる教師の机に刻まれるべきである。「善い教師は，教授活動にさいして難解で曖昧な言葉を善いラテン語だと考えないよう心掛けるべきであるが，さらに，難解さと曖昧さを避けつつ，民衆の話し振りに倣って，教育のある人のようにではなく，教育のない人のように話すようにさせなさい。というのは，聞く人の知性がついて行けないような，また私たちが理解させようとして語りかけている当の相手が分からないような上品な表現には，何の価値もないからである。それゆえ教える人に，教えることにならない一切の言葉を避けるようにさせなさい[18]。だからもし彼が，別の上品な分かる言葉を見付けることが出来るならば，そのような言葉を選ばせなさい。しかしもし彼が，そのような言葉が全くないために，あるいはタイミングよく思い浮かばないために，別の言葉を見付けることが出来ない場合には，ただ事柄それ自体の教授＝学習が立派に行われることを条件に，上品さに欠ける言葉を使うようにさせなさい」と彼はいっている。彼の説得には，彼の指令の場合と同じくらいの分別がある。「私たちは，一人もしくは数人の人と談話する時だけでなく，公衆の中で話す時にはそれ以上に，理解されるということを強く要求しなければならない[19]。というのは談話の時には誰もが私たちに質問する機会を持っているが，全員が一人の話者の話しに耳を傾けながら黙って座っているような場合には，理解しなかった責任が聴衆にあると考えることは，正しいことでも，ふさわしいことでもないからである。以上の理由から話者は，黙って聞く人の助けとなることを自らの心掛けとしなければならない。ところで学ぶことを切望している聴衆は，実際に理解しているかどうかを自身の態度で示す傾向がある。聴衆の理解に届くまで，私たちは，いろいろの表現

方法で問題点を述べ続けるべきである。準備して，一語一語，記憶したことだけしか教えない者には，以上のことを行う力量が備わっていない。また明らかに論点が理解されている場合には，講話を続行し，別の論点に移りなさい。というのは，私たちの知りたいことをはっきり示してくれる人が優れた教師であるのと同様に，私たちのすでに知っていることを教え込み続ける人は煩わしくなるからである。[20]」と彼はいっている (pp. 147-9)。

ラバヌスの晩年の伝記作家であるトリテミウス Trithemius[21]〔訳注・Johannes Heidenberg 1462-1516 ドイツの人文学者，聖職者［岩］〕に，ラバヌスは若い頃，「多数巻からなる」『*Prœparamenta*』つまり自由七科便覧を書いたと述べているところがある。しかし私たちに伝わった著作の中には個別の学芸に関する二つの論文だけしかなく，それらがトリテミウスの言及した『*Prœparamenta*』の一部である確証はない。しかし諸学芸の中の二つについての論文として，それらはここで言及されてよい。一つは，『プリスキアヌスの文法学抜粋 *An Excerpt on the Grammatical Art of Priscian*』と題されている。それは，末尾に添えられた短詩を別にすれば，ラバヌスが書いた痕跡を示すものの全くない，プリスキアヌスの文法からそっくり写しとられた書き抜きから成っている。もう一つの論文は『計算について *On Reckoning (Computus)*』と題され，960 の短い章から成っている。これはラバヌスの作品であり，820 年に書かれたものである。アルクインのいくつかの著作と同様に，それは教師と生徒の対話の形式で立案されている。それにはアウグスティヌス，ボエティウスならびにイシドールが引用されているが，準備に当って最も多く利用されている作家はベーダである。最初の八つの章は，数の重要性，「数」という用語自体の定義，数学的にではなく文法的に論じられたいろいろの種類の数――すなわち，基本的な，順序を示す，副詞的な，分配的な，倍数の，そして「警告的な」，と定義されている数，を論じている。次いで，文字による計算と指による計算という二つの異種の計算が述べられている。記数法は，ギリシャ数字とローマ数字の両方が示されているが，ここに描かれた指計算は，教育史上珍しいものの一つである。指で数える方法は，次のように説明されている。左手に，小指 (*auricularis*)，第 4 指 (*medicus*)，第 3 指 (*impudicus*) の 3 本の指がある。したがって 1 から 9 までのアラビア数字は，まず小指を手のひらの方に曲げることから始め，ついで 3 本の指で順次に別の数を示す仕草をすることによって，数えることができる。今述べた 3 本の指のほかに，人差し指と親指がある。これをいろいろ折り曲げることで，10 から 90 までの 10 の位が表わされる。したがって左手だけで 100 以下のすべての数を数えることが可能であった。次に右手がある。右手の数え方は，親指と人差し指から始め，ついで他の 3 本の指に進む――左手での数え方に用いられた方法のちょうど逆。右手の親指と人差し指は，いろいろ折り曲げることで，100 から 900 までの 100 の位を表すのに用いられ，右手の他の 3 本の指は，同様に 1000 から 9000 までの 1000 の位を表すのに用いられる。こうしてもし両手が手のひらを下にして開かれる場合，1 の位が左手の小指，第 4 指および第 3 指で左から数えられる。10 の位は，左手の人差し指と親指で数えられる。100 の位は，右手の親指と人差し指で，1000 の位は右手の他の 3 本の指で数えられる。したがって両手を協同して用いれば，合計 10,000 以下のどんな数の合計にも使うことができた。この指を折り曲げることによる表示法は，左手をいろいろの仕方で身体の異なる部分に置くことによって，10,000 から 90,000 までの 10,000 の位の計算をすることで，さらに一層拡張された。同様に右手は，身体の反対側の対応する部分に置かれた時，100,000 から 900,000 までの 100,000 の位の計算を可能にした。この粗野な方法の実例を一，二，例示しよう。教師は生徒に「君が 1 という場合，左手の小指をちょっと内側に曲げて，その指を手のひらの中に置きなさい」「君が 10 という場合は，親指の真ん中に人差し指の先を置きなさい」といっている。11 が，この両方を同時に行うか順々に行うかすることによって数えられることはいうまでもない。同じやり方で 100 は，ちょうど 10 が左手で数えられたように，右手で，親指の真ん中に人差し指の先を置くことによって表わされる。1000 は，1 が左手の小指で表わされたように，右手の小指で表わされる。それ故 10,000 以下の数ならどんな数も，身体の他の部分に触れることなしに両手で数えることが出来た。10,000 以上の数に対しては，上述したように別の方法が取られる。10,000 は，左手を平らに伸ばし，指は上を差して胸に置くことによって表わされる。20,000 は，胸部を横切って水平に広げられた同じ左手で，60,000 は，左太股に平らに伸ばして置かれた同じ左手で表わされる。100,000 は，右手の同じ仕方で表わされる。したがって一連のしぐさで，1,000,000 以下のどんな数でも表わすことが出来る。指をからませて，前でしっかり握り締められた両手が 1,000,000 のしぐさであり，これがこの指計算の最高数である。このようなしぐさによる数の体系が，ラバヌスによって，フル

ダの修道僧のために記録し，説明する価値があると考えられたということは，ひどい無学が広く行き渡っていたことの悲しい証拠である。指による計算は，最も原始的な知的特質しかもたない，厄介で始末に困る，最も粗野な野蛮人の間に広く行われている計算様式であるが，しばしばそれは，野蛮状態から一度も抜け出ることの出来なかった種族の特徴をなしてきた。それゆえ，サクソン人やフランク人を人間らしくし，またキリスト教徒に仕立て上げようとして示された中世初期の最も教養ある人びとの子どもっぽさを軽蔑の気持ちで見たくなるときはいつでも，彼らが働きかけていた素材がどのような質のものであるかを正当に考慮していただきたい。そうすれば彼らの子どもっぽさが，彼らの分別であることが理解されるであろう。何故なら，「彼らは，教えることにならない言葉でではなく，教えることになる言葉で教えたのだ」とラバヌスならいったかもしれないように，彼らは，ただ状況の中でなしうることだけをしようとしたのだから (pp. 149–53)。

計算に関する彼の著書の残りの部分は，目方に関するローマ人の割り算を論じている。すなわちポンド (*libra*) は 12 オンス (*unciœ*)，オンスは 24 スクループル (*scripuli*)，スクループルは 6 シリクァ (*siliquœ*) である。目方を示すこれらの名称は，いろいろのお金にも用いられるが，それだけではなく，同様に時間の割り算にも用いられる，と彼はいっている。彼には，分数に相当するものが必要なのだが，アルクインの場合と同様に，分数とは何かの観念が全く見られない。しかし面白いことに，度量衡の再分割は，6 もしくは 12 からなる記数法，つまり 12 進法で行われており，一方彼が整数に対して述べる表記法は，10 進法であることに気が付く。数章にわたる時間の割り算は，まったく奇妙なものである。時間の最小要素は，「アトム atom」と呼ばれている。私たちの 1 分間 minute に相当する 1「*ostentum*」には，376 のアトムが存在していると述べられているが，1 *ostentum* は 1 時間の 60 分の 1 であり，1 時間半は 1「モメント moment」と呼ばれている。「ミニット minute」という語はラバヌスに出現するが，それは 1 時間の 10 分の 1 を意味している。また「ポイント point」は 1 時間の 4 分の 1 である。さらに「1 時間は 1 日の 12 分の 1 である。というのは，我らが主が『1 日には 12 時間あるのではないか』と述べて，このことを主張されているからである」と彼は，言葉を続けている。この本の残りの部分は，暦年の構成要素・暦一般・太陽と月と遊星の諸現象にさかれており，復活祭の計算法がついている。また月のイーパクト epact〔訳注・太陽暦と太陰暦の年間日数の差〕を手の関節で計算する風変わりな計算法も含まれている。そして世界史のいくつかの時代についての言葉で結ばれている。この「計算について *Computus*」には，算術の実例はまったく含まれていない。従って的確な判断に立って，それをアルクインの算術の命題と比較することは不可能である。それは，算術に関する正式の論文と見るべきではなく，数・度量衡・時間の割り算・大空の一般的現象と関連する限りでの天文学・教会暦の計算を含む計算についての手引書と見るべきである (pp. 153–4)。

自由学芸についての彼の著作に関連して，彼のものとされている『ラテン–チュートン語語彙辞典 *Latin–Tudesque Glossary*』に言及する方がいいだろう。それは，彼の生徒のヴァラフリード・ストラーボ Walafrid Strabo〔訳注・808 頃–849 ドイツのライヒェナウのベネディクト会修道院長，神学者，詩人［キ人］〕によって口述筆記されたものといわれている。それには 200 足らずのラテン語が含まれているが，ラテン語で定義されたものもあれば，チュートン語の同意語の付与されているものもある。それらは人体各部の名称であるが，終わりに両方の言葉で月と風の名称が付け加えられている。それは，俗語についての学者の初期の認識を示すものとして，さらにはとくにラバヌスが初期ドイツ語にもった関心を示すものとして，興味深い。アルクインの時代に，ラテン語は，なまった仕方で発音されていた。これは，ラテン語の来たるべき運命を示唆するものであった。ラバヌスは説教をしなければならない人びとに，大衆が理解できるように話すこと，学問があることを必要とする表現の上品さを言い張るべきでないことを熱心に説いていたが，この用語辞典で彼は，さらに一歩を進めて，チュートン語俗語の同意語を付けたラテン語頻用語の簡潔な一覧表を編集している。それらの多くは，近代ドイツ語の輪郭をそなえている。たとえばラテン語の *os*（口）は，チュートン語の *mund* である。ラテン語の *jecur*（肝臓）は，*lebera* である。ラテン語の *pes*（脚）には，ドイツ語の *fuss* に近いチュートン語の *phuoz* がある[22] (pp. 154–5)。

『言語の起源について On the Origin of Languages』[23] という小冊子もまた，ラバヌスのものだと考えられている。そのある部分は，ヒエロニムス Jerome〔訳注・340 頃–420 キリスト教修道者・聖書学者［ランダム］〕から引用されている。解説を加えられたそれは，各文字の音をローマ字で表記したヘブライ語・ギリシャ語・ラテン

語のアルファベットを含んでいる (p. 155) [p. 155 1.28–p. 156 1.18 略]。

教育とは間接的にしか関係のない「霊魂論 *On the Soul*[24]」という論文は飛ばすと，考察のために残っているのは，『宇宙論 *On the Universe*[25]』と題されたあらゆる知識についての百科事典である。それは，彼がフルダの大修道院を引退して，ペテルスベルクでの閑居に入った後の 844 年頃に書かれたものである。この作品を作るのに，彼が，セビリヤのイシドールの巨大な『語源考 *Etymologies*』に助けを求めたのは当然であった。イシドールはすでに，20 巻からなる中世最初の綿密周到な百科事典を中世に贈呈していたからである。中世のローマ人が家を建てる際にコロッセウム（大円形演技場）を剽窃して建てたように，本を書くのに古典作家を剽窃したイシドールの例に倣って，今度はラバヌスが，他の場所ですでに書いた自由学芸の説明は省略しながら，イシドールの陳述を適当に拡張して，自分の本の大半をイシドールから採っている。年代学に関する章はベーダからも借り，また巫師（ふし）の書〔訳註・Sibyline Books シビュレーの本：ギリシアのヘクサメトロ詩形で書かれた祭政に関するローマ時代の神託書；ローマ王 Tarquinius Superbus が Cumae のシビュレー Sibyl からこれを買った話は有名。[ランダム]〕の説明のためにはラクタンティウス Lactantius〔訳注・L. F. 3–4 世紀のキリスト教護教家 [岩]〕からも，そしてまたパレスチナ王国の地理とヘブライ人の名前の説明のためにはヒエロニムスからも借用しながら。しかしイシドールのように自分の作品を 20 巻で仕上げるどころか，ラバヌスのは，ゆうに 22 巻もの内容があった。ところが 22 という数は神聖な数ではなかった。しかし彼はまったくの幸運に恵まれて，ヒエロニムスが旧訳聖書の全体を 22 巻に分けていた事実に偶然に出くわし，こうして神聖ではないけれども神さびた先例を自らに提供したのであった。この種の作品を読み通すことは全く侘しい仕事であるが，その内容がどの程度の範囲と多様性にわたるものであるかについてのある程度の理解なしには，当時の知識の総量，あるいは教育者が出会わなければならなかった精神の傾向が何であったかを評価することは困難である。その内容を見てみることは，確定された真理の具現として問題なく受け入れられていた，せいぜい二番煎じ，三番煎じのごちゃまぜの一般的知識の寄せ集めを評価するのに，決定的に役に立つ。同じくそれは，教育のない人だけでなく牧師の特徴ともなっていた訓練を受けていない軽信的な精神状態を評価するのにも，役に立つ。一般に誤った知識しか伝えられていないという背景の中にあっては，どんなに些細な光でさえ，いかに輝かしい光彩を放つことであろう！またラバヌスの著作の多くがたとえ愚かしいものであったにせよ，彼と彼が教育しようとした時代との著しい差は，何と現実のものであったことだろう！(pp. 156–8)。

彼の百科事典の吟味に取り掛かろう。22 巻は，二つの部分に分けられる。最初の 5 巻は聖なる知識を扱い，残りの 17 巻は世俗的知識を扱っている。明らかにごたまぜではあるが，作品をまとめる論理的に一貫した筋道はある。そういうわけで，最初の 5 巻の主題は，順次，以下のようである。神，次いで天上・地上の神の被造物である天使と人間。この人間の説明は，聖書に限定されている。したがってまずアダムが，その後に続くノアの洪水以前の人びとともに，来る。ついで族長たちが，他の著名な旧訳聖書の男女とともに，来る。それから予言者たちが，新訳聖書の登場人物と殉教者たちに従われて，やって来る。次に教会に関する説明が来る。そこには，教会と会堂，宗教と信仰，牧師，修道僧ならびにその他の信徒・異教徒・離教者の集団，真の信仰と教会の教義に関連した定義，および内容の要約をともなった聖書各書の出典についての若干の注記を含む聖書の説明，に関する諸章がある。それから，奇妙ではあるが不自然ではない脱線によって，図書館に関する 1 章，それに「文学的作品の多様性」の章がある。この「多様性」とは，書くことの許される論文の種類，一つの話を構成するさまざまの部分，章・節に分けること，ならびに本の実質的割り付けのことを指している。ついで福音書の教父による 10 個の対観和合〔訳註・四福音書全部または初めの三福音書［マタイ・マルコ・ルカ］の共観福音書に並行して記されている内容の類似点，相互関係および相違点を示すため本文を対観・整理・和合する編集作業［ランダム]〕リストである「福音書の宗規」に関する 1 章が続き，それに続いて，教会会議の法令，復活祭宗規，1 日の宗規にかなった分割とそれに結び付いた適正な勤行に関する他の数章が来て，教義，聖餐，悪魔払い，信条，祈祷と断食，告白と懺悔に関する結びの数章が来る。神と神の被造物と神の教会および聖地についての説明をもって最初の 5 巻は終わり，第 6 番目の巻とともに世俗的知識の説明が始まることになる (pp. 158–9)。

第 6 巻は，「人間とその諸器官」，すなわち人間の本性ならびに魂と肉体のいろいろの「器官」あるいは機能に関するものであり，すべてに正確な聖書の保証付きテキストが添えられて，文学的・神秘的・寓意的に説明され

ている。それはまた，肉体の各部のいろいろの相対的位置と動きの説明も含んでいる。こうして，立つことは信仰を象徴している。なぜなら，使徒が「信仰の中にしっかりと立ちなさい」といっているからである。この巻の結びの章は，聖書の中で悪魔の肉体の器官といわれる人間の肉体の諸器官にさかれている。それらの中には，目・鼻孔・舌・口・骨があり，「人間は西洋杉のように尾の部分を揺り動かす」という理由で，尻尾さえある (p. 159)。

第 7 巻は第 6 巻の一種の続編であり，人生の諸時期や結婚による親類関係のさまざまの等級を論じ，たとえば牧神・半獣神・巨人・犬頭人・ケルベロス〔訳註・ギリシア神話。冥府の門を守る 3 頭犬［ランダム］〕・ギンザメのような怪物様のもの，ならびに「獣群と荷を運ぶ獣」つまり家畜に関する 2 章が含まれている (pp. 159–60)。

第 8 巻は，動物学である。それはまず，ライオン・パンサー（ヒョウ）・パルド（ヒョウ）・レオパルド（ヒョウ）・トラ・オオカミ・キツネ・イヌ・サル，「およびヘビを除く，歯か爪で捕食する他の一切の動物」から始まる野獣一般を説明する。リストにある獣のどれにもその自然に関する描写がなされているが，その上に，特別の神秘的意味も付されている。多くの中から一例を示せば，斑点のあるパルドは意味が豊富である。それは，「神秘的には，多種多様の悪に満たされた悪魔の現われである。」またそれは，「罪と多様な過誤の斑点で覆われた罪人」を代表する。「ここから予言者は，『パルドは，斑点を他のものと取り替えることができない』というのである。」それはまた，「『パルドを子ヤギと一緒に横たえる』時」，千年王国〔訳註・キリストが再臨してこの世を統治するという千年間［ランダム］〕に結びつけられる。またそれは，「まるでパルドの中に入るがごとくに，海から立ちのぼった」黙示録の獣である，キリストの敵を代表する。野獣の次には，コオロギ・カエル・アリ・ハツカネズミ・モグラ・ハリネズミのような「小動物」が叙述されている。永遠の盲目と暗やみを宣告されているモグラは，偶像崇拝の象徴である。列挙されたアリの中にイヌのような形をした，エチオピアにいるといわれる種類のものがいる。このイヌ＝アリは，「脚で黄金の砂を掘り，誰かがその砂を盗まないように砂の番をしている。」カエルは手短に叙述され，「役にも立たない，おしゃべりなガーガー鳴きをやめない」「悪魔」であり，「異端者」であるとして宗教的な汚名を着せられている。ヘビ・ムシ・サカナ・トリに関する別の章が，これに続く。ついで「小鳥」の叙述が来る。これらの「鳥」の中にはハエがおり，ミツバチ・スズメバチ・バッタ・アリがおり，それぞれ，神秘的な意味をもっている。ミツバチは知恵を意味し，バッタはいろんな意味をもっている。ハエとハツカネズミは，もともとギリシャに発するものであり，さらにハエについては「水中で殺されたら，1 時間以内に生き返るであろう。」と述べられている (pp. 160–1)。

第 9 巻は，世界一般・その元素・いろいろの遊星・恒星・星座および大気の諸現象にあてられている。アトムは詳細に記述されており，すべてのものが作り出される元にある四大も，詳細に記述されている。ついで諸天について，ならびに天に入る二つの「扉」，すなわち東と西（というのは，太陽は一方から出て，他方から去るから）についての一般的叙述が来る。次に，二つの *cardines* つまり「分岐点」である北と南がある。光に関する 1 章と空の発光体一般に関するもう 1 章の後に，太陽・月・恒星・星座の若干についての叙述があり，明けの明星と宵の明星についての叙述がそれぞれ添えられている。この巻の終わりの部分は，空・雲・雷・稲光・その他の「きらめき」・虹・火・霜・石炭・灰・風・そよ風と穏やかな天候・つむじ風，および大嵐を扱っている。このように全体的にこの巻は，最初の部分で天文学的，最後の部分で気象学的である。第 10 巻は，年代学つまり「時代の区分」である。「水の多様性について」と題する第 11 巻は，全部が水に関するものである。水は，塩水・淡水・瀝青質の水・硫黄を含む水とある程度の分類が施され，多くの泉や小川のもつ薬効もしくは不思議な力が長々と述べられている。次に，例えば，大洋・地中海・紅海・「底無し海」・湾と海峡・湖と小さな池・激流と渦巻のような，水のいろいろの存在形態の叙述が来る。そして雨と二種の雨だれ（stilla つまり落ちる雫と gutta つまり落ちた雫）に関する章が添えられている。雪・氷・霜・霰・露・霧および豪雨の説明で，本巻は結ばれている。第 12 巻・第 13 巻は，地球の一般地理学で占められている。天国に関する 1 章と地球上のいろいろの部族や国々についての詳細な，地誌的・歴史的およびその他の説明的言及を含む「地球上の諸地域」に関するもう 1 章がある。ついでラバヌスは，鳥・山・丘・谷・平野および森の定義と叙述に移る。彼は，この巻を地理学上の特徴をもつ「いろいろの場所」の説明で結ぶ。まず「聖書にある場所」が来，次に「暴風の多い場所」が来，「野獣の穴」と次いで小さな森と砂漠が続く。これらの後に「曲がりくねった場所」「愉快な場所」「日当たりのいい場所」「暖かい場所」「造船の場所」，そして最後に「滑りや

すい場所」が来る。一番最後に，諸種の岸・洞穴・深い裂け目・「深み」・「落し穴」・冥界のエレボス〔訳註・創造説話で罪人または全死者が住むとされた地下の暗黒界［ランダム］〕の所在地とコキュトス川〔訳註・冥界を流れるアケロン川の支流［ランダム］〕の所在地についての説明が来る (pp. 161-2)。

第14巻は「公共建造物」に関するものであるが，その中に私的な住いが含まれている。それは，詳細な霊的解釈をともなった，古代人の家庭用と公共用の建築物の便覧である。第15巻は，古代人の哲学・詩および神話に関するものである。第16巻は，一般民用語と軍隊用語の定義をともなった様々の人間の種族・言語・政治形態の説明があるから，一種の人種学もしくは社会学といってよい。第17巻は，「地球の塵と土」つまり鉱物と金属に関するものである。まず塩やピッチのような「水中で見出される土」がある。次に「岩」・崖・火打ち石・石膏・砂および石炭のような「普通の石」が叙述されている。次いで黒玉・石綿と透明石膏・その輝きが「月とともに満ち欠けするといわれる」ペルシャの月長石のような「高貴な石」が来る。さらにもっと貴重な，大理石と象牙が来る。それらは，個別の章を割り当てられている。その後に宝石に関する1章があり，真珠・水晶・ガラスに関する数章が続く。七つの金属――金・銀・真鍮・琥珀金・錫・鉛・鉄――が，本巻を結ぶ (pp. 162-3)。

第18巻は，度量衡・数および音楽用語・医学用語を論じている。第19巻は，農業と植物学であり，いろいろの穀物・豆科植物・つる草・木・芳香性植物および普通の植物を次々に叙述している。第20巻は，戦争といろんな種類の鎧（ヨロイ），諸種の運動競技，造船および鉄工のことを叙述している。第21巻は，家庭用建築・大工仕事・織り紡ぎといった家庭向けの諸技術を論じ，いろんな民族の衣装や男女が身に着ける諸種の衣服を詳細に説明している。第22巻は，食卓・飲食器から始めて，台所用器具・バスケット・ランプ・容器および椅子に進み，庭道具と馬具で終わるさまざまの家庭用の器具と道具を詳論している (pp. 163-4)。

全く何たる量の寄せ集めであることだろう！それは，材料の配列と区分の点でイシドールの『語源考』の驥尾に付すものではあるが，それよりは若干薄められ，弱体化している。それでも全般的な計画がないわけではない。その上彼は，彼の時代に役立つ，ずっと具体的な知識をイシドールの業績に付け加えている――したがってイシドールの作品以上に有益であったことは疑いない。ラバヌスのその他の教育上の著作と合わせると，それは，教育作家としての彼の活動に完全さを添えるものであり，彼の思慮深さを示すものである。というのは彼は，正規の教育の面で同時代の人びとに方法と教材を提供しただけでなく，彼らの何にも知らない無知に対して，彼が入手しえた最も有益な普通の知識の広大な収集をもって応じ，方法の面だけでなく，時代の世俗的知識の内容に関しても時代の教師となり，こうして彼の仕事を，アルクインが形作った限界をはるかに越えて拡大したからである (p. 164)。

【注】[1), 7) 以外は，すべて，原著脚注]

1) 田中克佳「アルクインのこと（[英] Alcuin [羅] Alcuinus [Albinus] Flaccus）〈735?-804〉慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要第36号，1993.
2) ラトガー宛の詩 Poem to Ratgar (*Carm.* XIV), Migne, CXII, 1600.
3) *De Universo,* Preface to Haymo, Migne, CXI, 11.
4) Ep. 251 Jaffé; 187 Migne.
5) Litterarum series tuarum lætificavit oculos meos. Ep. 290 Jaffé.
6) *Alcuin*, Ep. 290 Jaffé. ラバヌスは，アルクインに図書を請うた。
7) [羅] Eriugena, Johannes Scotus 810?-877 以後；アイルランドの哲学者，神秘主義者［岩］〔上記の1）で言及されている。参照〕。
8) *De Clericorum Institutione,* III, cap. 2.
9) *De Clericorum Institutione* in Migne's *Patrologia Latina,* CVII, 293-419.
10) *De Clericorum Institutione,* Præfatio.
11) *De Clericorum Instituitione,* I, 1.
12) Nulla ars doceri præsumatur, nisi prius intenta meditatione discatur, I. 1.
13) *De Clericorum Institutione,* III, cap. 15, at the end.
14) Ad unius Dei laudem atque dilectionem cuncuta convertere. III, cap. 17.
15) 興味深いことに，これらの詩人はみな，アルクインのヨークでの書籍リストの中に認められる。
16) So aüsserte die Schule welche Hrabanus bekanntlich in Fulda eingerichtet hatte.....auch auf den Betrieb der Logik einen höchst günstigen Einfluss.—Prantl, *Geschichte der Logik*, II, 40.
17) Mullinger, *Schools of Charles the Great,* p. 145.
18) Qui ergo docet, vitabit verba omnia quæ non docent. III, cap. 30.
19) Ut intelligamur instandum est. III, cap. 30.
20) Sicut enim gratus est qui agnoscenda enubilat, sic onerosus, qui cognita inculcat. III, cap. 30.
21) Migne, *Patrologia, Latina,* CVII, 103.
22) Migne, CXII, 1575.
23) *De Inventione Linguarum,* Migne, CXII, 1580.
24) *De Anima,* Migne, CX, 1109.
25) *De Universo,* Migne, CXI, 9-614.